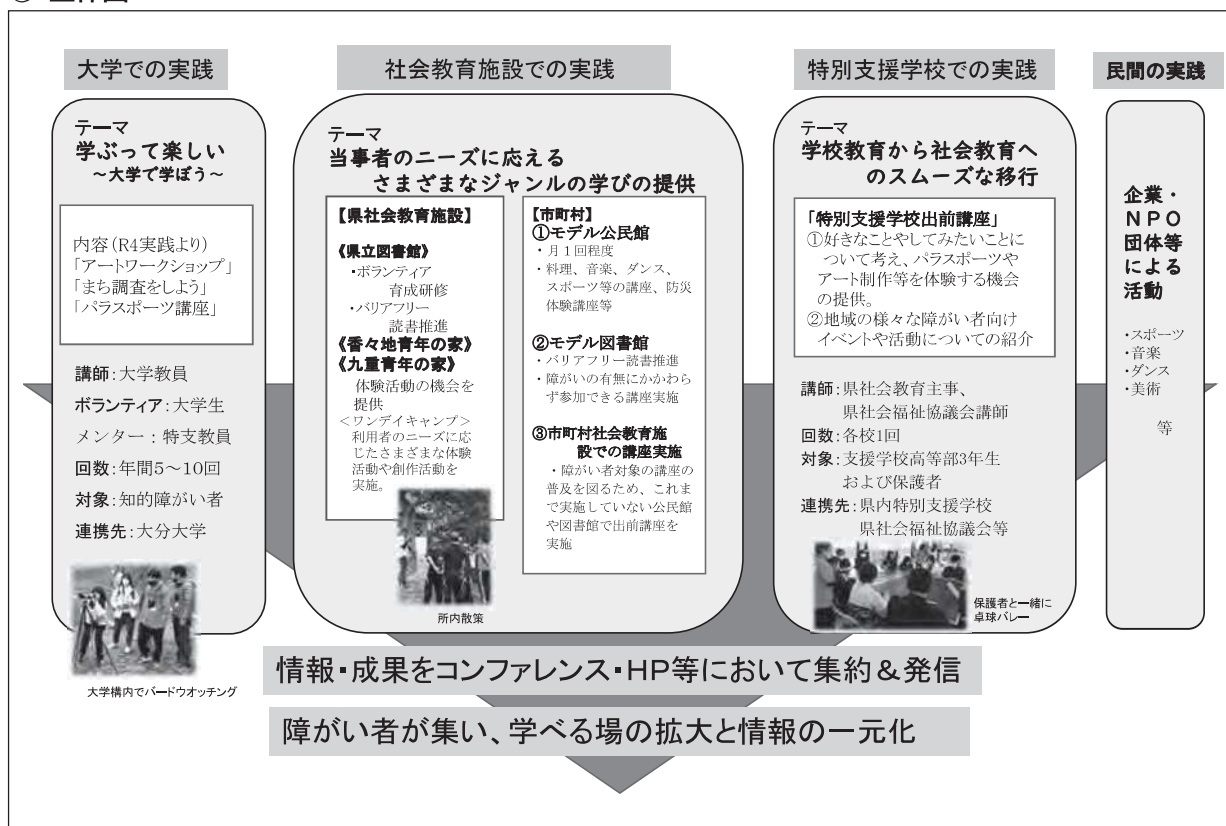


3. 実践研究

(1) 概要（令和4～6年度）

① 全体図



② 目的

大学及び公民館・青少年の家といった社会教育施設、特別支援学校でイベントや講座をモデル事業を展開するには以下の目的がある。

- ・取組を全県的に広げる
- ・障がいがある方のニーズや意見を把握し、フィードバックして改善に生かす
- ・社会教育関係施設職員や講師・ボランティア等支援者の障がい理解を深め、スキルを向上させる

③ 取組の拡充

3年間で、着実に取組は拡大してきた。

	R 4	R 5	R 6
モデル公民館・図書館（館）	1	3	6
大分大学生涯学習講座 受講者（のべ人数）	20	31	34
青少年の家ワンデイキャンプ 実施（回）	4	8	7
特別支援学校出前講座 実施（校）	3	5	7

④ 成果と課題

モデル公民館・図書館は地域人材の活用や地域団体との連携によりそれぞれ意欲的に講座を計画・実施しており、継続を望む受講者は多い。大分大学や青少年の家でのプログラムも同様である。

ただし、現在は「研究」ということもあり受講料は原則無料にしている取組がほとんどだが、持続可能という視点からみると、受益者負担の原則を検討しなければならないだろう。

また、指導者・支援者の養成とボランティアへの対価の保障について早急に考える必要がある。

⑤ 今後の展望

モデル事業（原則3年間）を終えた後、それぞれの事業主体が自走して取組を継続できることが最も重要である。その際、県は伴走支援を行っていく必要があるだろう。また、実績を積んだ事業主体がアドバイザーとして取組の普及に貢献できるような仕組みづくりも求められる。

(2) モデル公民館・図書館

日田市東有田公民館（令和6年度）

① はじめに

日田市は県西部、北部九州のほぼ中央に位置し、人口は約61,000人である。「一般財団法人日田市公民館運営事業団」が平成23年度より市内地区公民館の指定管理事業を行っている。

令和6年度は東有田公民館で事業を実施した。

② 令和6年度の実施

A. 第1回講座

目的：ポッチャを通じた「健康的な生活への意識向上」に繋がる学びの機会の提供及び参加者同士の交流、意見交換の場とする。

日時：令和6年11月3日（日）10:00～13:00

講師：東有田ステップ教室 濱田つや子氏他6名
社会福祉法人すぎのこ村 Beeすけっと

センター長 石松聡美氏

内容：ポッチャ体験、アンケート、振り返り

参加者数：障がい者10名 公民館職員17名
（うち館長8名） 講師8名 **計35名**

<振り返り：公民館職員>

- ・ポッチャはルールが簡単で分かりやすいので初めての活動としては適当だった。
- ・靴の履き替えに困難がある方がいた。事前にイスを何脚か置いておいた方が良かった。
- ・知的障がいの方の行動に戸惑い、声掛けをするべきかどうか困った。

<感想・助言：石松氏>

- ・障がい者にとってこのような取り組みは大切な命を守ることに繋がる。今日の第一回は大きな「一歩」となった。
- ・障がい者特有の言動に対しては、本人に声掛けをしてほしい。「人権に配慮」などと難しく考える必要はない。



< ポッチャを楽しむ参加者のみなさん >

イ. 第2回講座

目的：料理教室を通し調理に関する知識理解を深め、生きるための基本となる食に興味を持ってもらい、参加者のより良い生活に繋がる学びの機会を提供する。

日時：令和6年11月24日（日）10:00～13:00

講師：東有田地区食育推進協議会員 4名

社会福祉法人すぎのこ村 Beeすけっと

センター長 石松聡美氏

内容：料理教室（石垣饅頭・へこ焼き・おにぎり）、アンケート、感想発表、振り返り

参加者数：障がい者12名 公民館職員17名
（うち館長4名） 講師5名 **計34名**

<振り返り：公民館職員>

- ・事前の情報提供のおかげで不安なくできた。
- ・「いっしょくた」に考えず、一人ひとりに向き合うことが必要だと気付いた。
- ・地域で行うときの支援体制づくりが大切。

<感想・助言：石松氏>

- ・様々な人と会うことで様々な障がいがある人がいることが分かる。出会いが大事。
- ・「障がい者だから」と子ども扱いすると本人もあまり気持ちの良いものではない。
- ・災害時に公民館に安心して来れるようになることが「命を守る」ことに繋がる。



< みんなで楽しく「いただきまーす」 >

③ 成果と課題

公民館の講師やアドバイザーの石松氏等、地域人材を活用した講座は、参加者からも「楽しかった」「また行きたい」と好評であった。また、職員研修の場として、振り返りを丁寧に行い、支援のスキル向上を図った。

来年度以降、回数や実施館を増やしていくための協力体制づくりが必要である。

国東市（令和6年度）

① はじめに

国東市は県北東部の国東半島東部に位置し、人口は約25,000人である。今年度より、モデル公民館事業を実施している。

② 事業概要

目的：共生社会の実現に向けた、障がい者の生涯学習支援を目的とする。

内容：学校卒業後の障がいのある方の学びの場を提供するため、令和6年6月～2月の間に、5回程度、障がいのある方を対象にした公民館講座を開催する。

対象：国東市内の障がい者就労支援施設利用者

①NPO法人 輝くピアホーム ②社会福祉法人秀溪会 秀溪園 ③合同会社 ホウエン ④株式会社国東半島 松本農園 ⑤社会福祉法人共生荘 障がい者サポートセンター三角ベース

③ 令和6年度の取組

ア. 取組

	日時	内 容	会場	参加者
1	R6/ 7/ 6	多肉植物の寄せ植えをつくろう	武蔵西地区公民館	秀溪園利用者10
2	R6/ 8/ 3		三角ベース	三角ベース利用者11
3	R6/ 9/21		国東中央公民館	市内全障がい者就労支援施設利用者
4	R6/ 10/ 5	卓球バレーをやってみよう	国東市隣保館	9/21：6 10/5：13
5	R6/ 11/ 2	多肉植物の寄せ植えをつくろう	国東中央公民館	ピアホーム利用者14
6	R6/ 11/16	楽しく体を動かそう！3B体操	国東中央公民館	市内全障がい者就労支援施設利用者13



< 多肉植物の寄せ植え 自分で選んで植えます(第1回) >

イ. 企画・運営上の工夫

国東市は広域に事業所等が存在するため、中央公民館での実施を基本としつつ、武蔵西地区公民館や隣保館に出前講座を行うというアウトリーチ方式を採った。中央公民館の講座では市のバスで送迎を行った。

また、障がい理解促進と一般講座での実施を見据え、講師には普段公民館で講師を務める方をお願いした。

④ 成果と課題

< 多肉植物の寄せ植え >

- ほとんどの参加者が講師の話をよく聞き、集中して制作していたため、予想よりも完成が早かった。
- 時間や難易度もちょうど良いとの回答が多かった。
- 講師、補助員の教え方についても、「わかりやすくよかった、またやりたい」との評価が目立った。
- 何でもいいのでまた講座に参加したいとの回答もあり、学びに対する意欲の高い人がいることが分かった。

- 2回目以降、作業全体を把握しやすいよう、作業手順を掲示した（前回の指摘による）

< 卓球バレー >

- 講師との打ち合わせで、ルールよりもある程度自由なプレーで楽しんでもらうことを重視した。
- 未経験者の中には手を出しにくそうにしている人もいた。練習用コートで少し慣れてもらうとよかった。

< 3B体操 >

- 運動への関心の高さが感じられた。
- 4割の参加者がやや難しいと感じたようである。ただ、もっとやりたかった、次回も続けてほしいとの意見もあり、少し難しいことに挑戦する楽しさを感じてもらえたのであればよかった。



< 3B体操 楽しく汗をかきました(第6回) >

⑤ 今後の展望

来年度以降も引きつづき事業を実施予定である。障がいのある方とない方が共に学べる講座も検討したい。

杵築市立図書館（令和6年度）

① はじめに

杵築市は県北東部の国東半島南部に位置し、人口は約27,000人である。今年度より、県内公立図書館として初めてモデル事業を実施した。

② 事業概要

目的：障がい者の学びの場を提供するとともに学びの場の環境整備を行う。

課題：施設のバリアフリー対応はあるものの、障がい者の利用はあまり多くない。

共に学ぶための場として、職員のスキルアップや資料の充実、障がいの程度に応じた講座やイベント等、幅広い企画とサービスの構築が必要と考える。

③ 令和6年度の取組

ア. 第1回講座

日時：令和6年8月24日（土）14:00～15:00

講師：原野彰子氏 内容：絵手紙教室

参加者数：14名（うち障がい者8名）

成果：障がいのある人もない人も空間と時間を共有して行う講座は図書館では初めての試みで、従前のイベントと同じ対応でよいか懸念があったが、いざはじめてみれば講師の原野先生や図書館スタッフによる知的障がいがある方への自然な声掛けにより、スムーズにすすめることができた。

アンケート結果では、「障がいがある方を含め誰でも参加でき皆で楽しめるイベントがあればまた参加したい」という意見があった。



＜ まずは線の練習から！皆集中してます ＞

イ. 第2回講座

日時：令和6年10月12日（土）

午前：10:00～12:00

午後：13:30～15:30

内容：バリアフリー映画上映

バリアフリー図書の展示、紹介（10/2～28）

参加者数：

午前の部10名（障がい者3名）「天使のいる図書館」

午後の部12名（障がい者1名）「桜色の風が咲く」

成果：これまで字幕や音声ガイドありの経験がない健全者も、特に抵抗なく映画を鑑賞し、感動して涙を流している方もいた。良質の映画を提供することで、障がいのあるなしを意識することなく豊かな人間性を醸成する手助けになるのではないかと。

映画を上映する前には、バリアフリー図書の紹介をして一般の方にも大活字本やL1ブック、布絵本、しかけ絵本、デージー図書について知ってもらおう良い機会となった。



＜ バリアフリー図書の説明を聞く参加者 ＞

ウ. 第3回講座

日時：令和7年1月24日（金）13:30～14:30

講師：藤松美潮氏 内容：ミニミニオリンピック

参加者数：25名（うち障がい者19名）

成果：市内障がい者施設に声掛けし、公民館講座の講師をしている藤松美潮先生の指導のもと、図書館オリジナルルールでレクリエーションを行った。

スタッフが臨機応変に対応し、途中で参加を中断した方もいたが、本人が参加したい競技だけ参加してもらうなど強制せず、施設の方に声掛けしてもらいながらトラブルもなく実施できた。

④ 今後の展望

これからの図書館は「サードプレイス」としての役割も求められることになることを想定し、個人や団体それぞれの多様なニーズに応えられるよう、これまでの図書館活動ではなく、一歩進んだスキームを持つことが大事であると考えている。

中津市生涯学習センターまなびん館「まなびば」(令和5～6年度)

① はじめに

中津市は大分県の最北部に位置し、人口は約81,000人である。令和5年度より中津市生涯学習センターまなびん館で事業を開始して2年目になる。

② 令和5年度の実組

ア.現状

全ての社会教育施設は障がい者の有無に関わらず、すべての人に対して「いつでも、どこでも、だれでも」学ぶことができる生涯学習の場をつくるべきだが、実態として障がいがある方の利用はほとんどなく、障がい者だけの団体利用はゼロだった。

イ.事業をはじめるにあたり

令和5年度に県の「障がい者の学びを支援するモデル公民館事業」を受託することを決め、まずは情報収集を行った。市の福祉部局や市社会福祉協議会等に話を聞き、障がい児・者余暇活動支援事業「てくてく」(市社会福祉協議会の事業)を見学した。その指導員から「発達障がい児親の会」を紹介され、その例会に出席して、学習ニーズの把握に努めた。

- ・公民館などの施設は他の利用者への迷惑を考えて利用しづらい。
- ・卒業後に職場と家の往復だとストレスがたまる。
- ・支援学校での学習や経験が卒業を機に途切れてしまうのが残念だ。
- ・将来自立して健康な生活を送ってほしい。生きる基本は食なので食生活に興味を持ってほしい。

といった意見を参考に、包丁や火を使わず、炊飯器やホットプレートでおいしくできる「かんたん料理」講座を実施することにした。



＜ ホットプレートでお好み焼きをつくります ＞

ウ.取組

	日時	内 容	参加者
1	R6/ 2/11	かんたん料理教室 ①チキンライス ②ハンバーグ ③ケーキ	当事者：8 保護者：8 講師：1 スタッフ：8
2	R6/ 2/18	かんたん料理教室 ①チキンカレー ②お好み焼き ③きな粉もち	当事者：9 保護者：9 講師：1 スタッフ：7
3	R6/ 3/ 3	かんたん料理教室 ①いなりずし ②手巻きずし ③からあげ ④ホットケーキ	当事者：9 保護者：9 講師：1 スタッフ：7

参加費(材料代)を徴収している。(500円程度)

エ.成果と課題

- ほとんどの参加者は自力で調理ができたので、保護者は別室で情報交換の場を持つことができた。
- 参加者の中にリーダー的な存在が生まれ、調理の仕方を他の参加者に教えたり、「いただきます」やお礼の言葉などを代表して言ったりした。
- 3回の活動ごとに振り返りを行い、参加者も皆の前で感想を発表することができた。
- 学んだ料理を、家庭でも挑戦するように勧めたところ、家で料理をした参加者が6人いた。また、保護者も包丁や火を使わない調理方法に関心を持ち、「手伝わせてみよう」と考えるようになった。
- 毎回のアンケート結果では非常に満足度が高く、特に保護者から感謝の声が多く聞かれた。
- マンツーマンで指導する場面があるため、支援者の確保が必要である。
- 活動場所から離れてしまう参加者の対応が難しい。
- 学習目標の達成度を測る基準をどこに見出せばよいか分かりづらい。
- 運動系や絵・音楽などの文化系の活動の希望があるが、内容や場所の選定、支援者の確保などが課題である。

③ 令和6年度の実組

ア.ビジョン

昨年度の反省や課題を踏まえ、講座のブラッシュアップを図った。

(ア)活動の定期化⇒「月に1回、日曜日開催」

(イ)募集対象の拡大⇒市内事業所、中津支援学校高等部にも案内

(ウ)学習内容の進化⇒昨年度好評だった「かんたん料理

教室」に加え、「体験料理教室（そば打ち、パンづくり、和菓子づくり）」「ランニング教室」を導入した。
 (工)サポーター導入⇒「支援者研修会」を実施し、3名のサポーターを確保した。
 (オ)講座名を参加者が覚えやすいように「まなびば」とした。

イ. 目標

- (ア)生きるための基本となる食について興味をもち、家庭でも料理に挑戦してみよう。
 (イ)料理と運動などの活動を通して、自分の力でできたことに自信を持とう。
 (ウ)この活動を通して、家族や職場、学校以外の人との交流を持ち、知り合いを多くつくろう。
 (エ)自分の健康管理について関心を持ち、健康的な生活を送ることの大切さを知ろう。
 ⇒ **社会教育としての学習目標**を達成するために、
 (ア)講師との打ち合わせの中で、参加者が作業や運動をする場をできるだけつくる。(安全面の配慮)
 (イ)掲示物を工夫する(視覚効果)。
 (ウ)配膳や後片付けをできるだけ自分たちで行う。
 (エ)「いただきます」等の号令は参加者がかける。
 (オ)ふりかえりの時間を作り、感想を書き、発表をする。
 (カ)かんたん料理は、できるだけ家庭で作ってみようように促すための宿題を出す。
 (キ)小さなことでも褒めて、成功体験を味わってもらう。



< 走る前にしっかり準備運動 >

ウ. 取組

	日時	内 容
1	R6/ 6/ 2	午前：料理（茶碗蒸し、一銭焼き、おにぎり） 午後：ランニング教室 社会教育施設講座支援者研修
2	R6/ 7/ 7	午前：料理（そば打ち）、 午後：ランニング教室（室内）

	日時	内 容
3	R6/ 8/25	料理（和菓子づくり）
4	R6/ 9/ 1	料理（パンづくり）
5	R6/ 9/29	午前：料理（カップ寿司、塩からあげ、おにぎり） 午後：ランニング教室
6	R6/11/ 3	午前：料理（かけそば、おにぎり） 午後：ジョギング、体操、リレー
7	R6/12/ 1	午前：料理（むかごご飯、チキン南蛮風、こね切り餅） 午後：ランニング教室
8	R7/ 1/ 5	午前：料理（パンづくり） アンケート調査 午後：ランニング教室
9	R7/ 2/ 2	午前：料理（恵方巻、醤油からあげ、お豆腐まんじゅう） コンファレンス発表報告 午後：ランニング教室

< 参加者 >

参加者数 10.3名／回（平均）

＊登録者14名（特別支援学校高等部3、
A型事業所1、B型事業所9、一般事業所1）

エ. 成果と課題

< 保護者アンケートにみる受講者の変容 >

- 家で、食事の準備や片付けの手伝いをすすんでしてくれるようになった。
- 毎回感想を皆の前で発表することによって、人前で話すことに少し自信がついたようだ。
- 一人で買い物に行けるようになった。
- 「まなびば」がきっかけとなり、1週間に一度、親子で体操やランニングをするようになった。

< 運営側の振り返り >

- 何かを身につけることや気づくことを主眼に活動してきた。参加者や親にとってハードルが高いところもあったが、常に一生懸命に取り組んでいた。
- 「かんたん料理教室」のレシピをパンフレットにまとめたので、支援学校や事業所等に配布し、今後の事業展開につなげていきたい。
- 活動場所が広い調理室となり、親も一緒に参加するようになったので、子どもの新たな特性や成長に気づくことができた。
- 目標を設定した社会教育活動を行うには、継続的な学習が望ましいが、定員を設けざるを得ず、多くの方に学んでほしいという思いが叶わない。
- 今後は、障がいのあるないに関わらず、共に学ぶ喜びを分かち合える場を作っていく必要がある。

由布市庄内公民館「ゆふぽきらきら教室」(令和5～6年度)

① はじめに

由布市は大分県のほぼ中央に位置し、人口は約33,000人である。令和5年度より庄内公民館で事業を実施し、2年目になる。

② 令和5年度の実施

ア.事業をはじめるにあたり

由布市社会福祉協議会、障がい者支援施設、多機能型事業所、県立由布支援学校といった外部団体と、由布市福祉課、部落差別解消推進課、社会教育課、庄内公民館といった庁内との連携を図るため、スタッフ会議を開催して支援体制を構築した。

第1回会議(6/28)には代表者9名が参加し、公民館で障がいがある方を対象とした講座を実施するという事業の趣旨に賛同をいただいた。問題点としては、

- ・障がいの程度や年齢層に差が生じる
- ・教室の内容次第で参加人数が変更する
- ・「学び」につながるか心配である
- ・施設の職員が同行するので多数の参加は不可能

といった点が挙げられた。

第2回会議(8/17)では前回の問題点を解決するために話し合った。その結果、

- ・障がいの程度は軽度、年齢は問わない
- ・参加者を固定しない(都度募集とする)
- ・「ふりかえり」を行い「学び」に繋げる
- ・同行者1名で3～5名の参加で可

という共通理解を得た。



< 大人数でも楽しめるふうせんバレー >

イ.取組

	日時	内 容	参加者数
1	R5/ 10/ 4	①ポッチャ ②ふうせんバレー	当事者：13 講師：1 協力者：18
2	R5/ 10/25	①読み聞かせ ②ものづくり教室 (クリスマスツリー)	当事者：7 講師：2 協力者：14
3	R5/ 11/29	映画鑑賞 (トムとジェリー)	当事者：22 講師：0 協力者：13
4	R5/ 12/20	①料理 (フルーツたっぷりパ フェづくり)	当事者：18 講師：3 協力者：16

ウ.成果と課題

○本事業を通じて、他団体や各課との連携・支援体制を構築することができた。

○講座内容に、障がいがある方や施設職員の意見を取り入れた。

○各会の終わりに必ず参加者とスタッフで「振り返り」を行うことで、学びにつなげることができた。

○ものづくり(クリスマスリース制作)やおやつづくり(フルーツパフェ)など、形を残す活動を行うことで、参加者の満足度が高く、次回の参加を楽しみに待つ姿が見られた。

○第3回は冬休み中の実施であったが、特別支援学校小学部児童6名が参加した。「在学中から卒業後へつながる」きっかけとなったと言える。

●障がいがある方と健常者がもっと交流できるような工夫が必要である。

●働いている人が参加しやすい工夫(土日開催の検討)をする。

●来年度以降、どのように障がいがある方の意見や希望を取り入れた講座を作っていくか、また、支援者や講師を発掘・確保していく必要がある。

③ 令和6年度の実施

ア.取組(JL:「ジュニアリーダー」を指す)

	日時	内 容	参加者数
1	R6/ 7/22 (月)	①ポッチャ ②夏祭り	当事者：41 講師：1 ボランティア：5 由布市JL：10

・ポッチャのルールを早めに理解し楽しそうに取り組んだ。

・夏祭りでは、由布市ジュニアリーダーズクラブが企画運営を行った。子どもたちや一般参加ボランティアが障がいがある方と交流する良い機会となった。



< 子どもとふれあうジュニアリーダー >

	日時	内 容	参加者数
2	R6/ 9/12 (木)	アート教室 (マスキングアート、 ステンドグラスづくり)	当事者：16 講師：3 ボランティア：2

- ・大型用紙（3.5m×1.5m）にペンキでペイントを実施。アート完成時には歓声があがった。
- ・ステンドグラスづくりでは、配色に工夫しながら台紙に色とりどりのセロファンを張り付けた。
- ・初めての内容だったが、学習効果も高かった。

	日時	内 容	参加者数
3	R6/ 11/11 (月)	①映画鑑賞 (パンダコパンダ) ②ものづくり教室 (クリスマスリース)	当事者：14 講師：1 ボランティア：5

- ・大ホールで映画を鑑賞したあと、会議室へ移動してリースを制作した。
- ・受講者は好きな色を使ってオリジナルリースを完成し、「家で飾りたい」と嬉しそうに語る姿もあった。

	日時	内 容	参加者数
4	R6/ 12/21 (土)	①料理 (ティラミス・アップルパイ)	当事者：14 講師：1 ボランティア：4 由布市JL：2

- ・調理室にてクッキング教室を開催。飾りつけなど難しい部分もあったが支援者と協力しながら全員が完成させることができた。
- ・試食では、ボランティアさんと楽しく話しながら美味しくいただいた。



< マスキングアート（第2回）庄内公民館に展示 >

イ. 成果と課題

- 障がいがある方と健常者との交流の機会が少なかったという昨年度の反省を生かし、今年度はボランティア等との交流の機会を増やすように心がけた。特に、由布市ジュニアリーダー（注）たちと連携して実施できた「夏祭り」の取り組みはインクルーシブな講座実施に向けた大きな一歩である。
- 毎回丁寧なふりかえりを行うことにより、「難しかった」「家でも取り組みたい」といった当事者の声を取り入れて内容や支援の方法を考えることができた。
- 市報や市のHP、回覧板等で公募したところ、ボランティアが7名集まり、周知方法の効果が見られた。
- 障がい支援施設の職員からは、「講座内容もすばらしく、ずっと続けていってほしい」と要望がある。
- 公募したが、受講者の応募はなかった。
- 庄内公民館は公共交通機関で来館することが難しいため、来たくても来られない可能性もある。
- 教育的効果の検証が難しい。



< 受講者・協力者を行う「ふりかえり」（第1回） >

④ 今後の展望

2年間の実施により、関係者の連携体制も整い、講座運営も安定してきた。受講者も毎回楽しみに来ている。3年目となる来年度は、実施回数や内容について、様々な方面からの意見を反映させたものにしたい。また、チラシや市報では当事者に情報が行き渡らない可能性がある。周知方法を工夫して、施設単位の参加から、在宅の方、一般就労の方へと参加を広げたい。

※注：「ジュニアリーダーについて」

由布市では、中高生を対象に学びの支援やネットワークづくりをととして人づくりや地域づくりに関わる青少年リーダーを各地域で組織化し、活動を支援している。